

マクワーター氏初學心得

石川欽一郎

マクワーター氏は英國ロイアル、カデミー正會員にして風景畫の大家なり。イースト氏は溫健の畫風を以て鳴り。マクワーター氏は優艶の筆を以て賞せらる。左に氏が近著水彩風景畫帖より初學の心得を抄譯すべし。

常に手帖を携帶すべし。記憶力は中々急には養成されるものに非らず。今見る佳絶の光景はいざ寫さんとする中には忽ち消へ失す可ければ。此の如き場合には先づ之を手帖に覺へがきして。後に我記憶より畫くの外なし。

時間なき爲め輪廓を取り又た繪具を塗ると云ふ兩方は出來難き場合には。先づ輪廓だけを丁寧に取りつて置き。色彩の關係が我記憶より消へざる内に其の輪廓の上か又は別の紙かに繪具にて畫くべし。此方法にて練習積まば遂には我が目撃したる種々なる光景。佳麗なる事物を心の眼の前に現出するを得るに至るべし。

模寫と云ふことは敢て之を獎勵せざる考へなり。模寫のみを事とすれば他人の眼を借りて自然に對すると云ふ嫌あるべし。凡て自分は自分の考で見ざる可からず。獨立獨行して遂に失敗するとも。他人の驥尾にのみ附隨するに比すれば寧ろ優ること數等なるべし。然れども先輩大家の作品を熟視して深く其妙所を會得することは無論有益なるのみならず。世の名品傑作に接して其各部を模寫し。以て大家が遺風を探究することは益こそあれ毫も害あらず。例へばターナー筆「霜深き朝」の前景の如き。又た同畫家筆「ハロルドの行脚」渡頭「バイエーの入海」等の遠景の如き。皆模寫に好きものにして何れもトラファルガー、スクエアのナシヨナル、ギアラリーに陳列しあり。其他ミレイス筆「盲目娘」オフェリアの二圖に於て。其かきこなしの妙と空氣の工合。殊に「オフェリア」の方の薔薇の植込と柳とは。或は水彩畫にては模寫難からんとも須らく試

むべく。又同畫家筆「尼が墓を掘る圖」の背景も亦模寫の好材料なり。「盲目娘」はバーミングハムのコーポレイション、ギアラリーに。「オフエリア」と「尼」の二圖はテート、ギアラリーに何れも陳列しあり。

右兩大家の妙處を探究し盡さんことは中々容易ならずと雖も。先づターナーより學ぶべきは。光と空氣及び山や雲の畫法にあり。ミレイスよりは何として凡て學ばざるはなし。此畫家の作は皆健全にして何れも愛すべし。「薄寒き十月」等の風景畫の如き。其感想は凡て詩的なると共に併かも自然より受けたる忠實にして且づ杜撰ならざる手法を以てせり。然れども此畫家の風景畫の傑作としては。前に挙げたる如き人物畫の背景に多く之を見るべし。

風景畫家は皆生れながらにして記憶力に富めるものなれども尙且つ之を養成開發するの要あれば。前に述べし如く迅速に覺書を取るの方法を練習すべし。或は時に數日若くは數週間一本の樹の前に座し。力一杯其美しき有様や巨細の趣を寫生するも可なり。草。苔は勿論。棒千切。柔らかや硬き石。岩等をも畫くべし。殊に花を研究すべし。花瓶に插したるものでなく庭や路傍或ひは山路に咲ける花を畫くなり。花と云ふ中には無論葉などをも含むなり。此の如くして手帖に練習を積み。又た雲や山等をも研究する中漸やく我能力も發達し。終には一度見た景色と少しも違はず其感じの儘に畫くを得るに至るべし。感じを畫くと云ふこと即ち印象派に二種あり。即ち只大體の漠たる印象に依れるが如き一派尤も此派の作品中には甚だ興味あるものもありと又たそれよりも更に有力なる印象に依り。他の印象派が見たる處は皆之を見たる其上に猶色彩や細部分の關係。物質の狀態等をも悉く記憶して之を描出すると云ふ一派なり。ターナーは風景畫に於て印象派中獨歩の大家なりとす。

時としては畫家が如何にして出來たか自分にも分らぬ内に傑作が仕上ることあり。要するに一枚たりとも研究の作ならざる可からず。

洪水。激流の如きは一氣に筆を走らす時は其急奔の勢を助くべし。風に飛ぶ暮雲。其他急速に動く物體は

皆此筆法にて畫べし。木の枝。葉。花等には風に揺らるゝ場合の外はかく急速に筆を用ゆるの要なきなり。白を用ゆる場合は。光を烈しく現はす時か。若くは畫を強く畫かんとする時にあり。例へば青空若くば曇れる空に黄色の葉を畫かんとする時には。先づ樹木を白のみにて畫き。乾いてから黄色を其上に掛ければ少しも色の透明を失ふことなく。白を用ゆる上に於て之れ最良の方法なりとす。白を用ゆるも變色の憂なし。併し一般初學者の爲めには白を用ゐず凡て透明色のみにて畫くを可とす。之は色が濁ることなく又た重くならざるが故なり。(終)

水彩畫の繪具 (その二)

陶器入の練製も硬くなる恐れがある、これも大形と小形とあるから、多く用ゐぬものは小形のを求めた

らよい。
乾製繪具は、種類によつて其儘繪具箱へ入れて置いて、筆の先で充分溶けるものもあるが、中には硬くして始末にゆけぬものもある、尤も期節にもよるので、春夏の候、空氣に濕氣の多い時分には大抵軟らかになつてゐる。

乾製繪具を練製と同じように軟らかにするには、茶碗か盃の中へ入れ、熱き湯をヒタ／＼に入れて半日程置くと、心まで軟らかになる、その時湯を捨て、グリスリンを少し入れ練つて置き、入用の時繪具箱なりバレットへなり少しづつ出すのである、このグリスリンを入れる量が一寸加減もので、總じて透明質の繪具、殊にクリムゾンレーキやフーカスグリーンの如きは流れ出す憂があるから、ほんの少し入れる、コバルトやエローオークルのやうな色は澤山グリスリンを入れても差支ない。

繪具の良否は製造會社によつて定むることも出来るが、變色する繪具は其價の高下に拘はらず如何ともすることが出来ぬ、廉價の繪具で不變色なものもあり、高價にしてやはり廉價のものと同様に變色するものもある。

多くの會社の製造される繪具には、普通美術家用と學生用とある、時として學生用の、安物計り作る家もあり、又美術家用ばかり造る家もある。

日本に輸入されてゐるものは、佛國製ではブランシ會社製の大小チューブ、陶器入、ケーキ、並びに繪具箱で、次には英國のニュートン製が盛んに來てゐる、關西ではロンドンのローニー會社の分で、學生用チューブが多く、近頃は森親子商會で、同じくロンドンのラファエル會社の美術家用チューブを取寄せた。近くに文房堂及び大阪の吉村で、ロンドンのニューマン會社の美術家用を取よせることになつてゐる。